

KENKENにゅーすNo.7 for people studying of hearing difficulties

通級中学生学習会を振り返って

今ドキの通級中学生の悩みとは？



文化の日に本校通級指導教室に通う中学生7名に来てもらい「通級中学生学習会」を開催しました。事前にアンケートとして

質問や現在悩んでいることなどを書いてもらいました。中学生だし思春期だから色々悩みがあるのだろうなとは思っていましたが、ふたを開けてみたら「補聴器について」の質問が大半を占めていたことに驚きました。「補聴器を付けることが恥ずかしいがどうしたらいいか」「補聴器をつけると言われているがどうしたらよいか」などなど…多分、疑問や悩みの根本は「人と違う自分をどう受け止めたらいいのか」ということだと思います。中学生になると人と自分が違うことが気になる年ごろ。その時期に難聴中学生に補聴器の悩みなどが出てくるのだと思います。

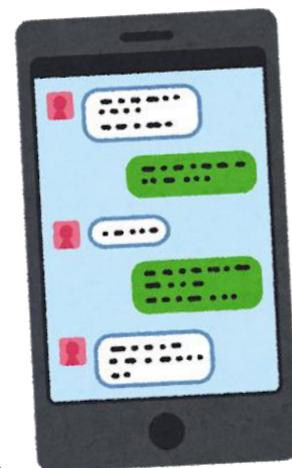
思春期になると、子供は「自分らしさとは何か」を見出そうとする時期になります。言われたとおりにするのは嫌だ、人と同じ行動をしたくないと反発したりもします。ところが難聴学生は聞こえる人と同じようになるのに必死でそれに時間を割き、聞こえる同級生が水面下で自分らしさを見つけるために努力している情報が伝わってきません。

そんな中、学生時代を終え、社会に入ろうとするとき、就職等の面接で聞かれます。「あなたの個性は何ですか？」と。「自分らしさ」を見出すために日々努力に勤しんできた一般の学生と違い、「普通であること」を良しとしていた難聴学生には、その質問になかなか答えられません。

初体験「サイレント座談会」

さて、実際の座談会当日、難聴中学生に対して即

席でできる情報保障の一環として、事前にアプリをインストールしてもらいました。それに普段の使い慣れたLINE感覚で文字入力していき、入力した文字はモニターで出力され、会話の様子が会場の保護者からも見られる、という方法でやってみました。文字入力なので、自分を含め全員音声は一切発する必要がなく、コロナ対策にもなります。



最初は、みんな初めての方法に戸惑っていた様子でしたが、次第に慣れ、だんだんと普段のLINE感覚で会話が進むようになってきました。会話が盛り上がってくると、スピード感が重視され、主語が抜け落ち、文も短文になっていき、最初お互いに気づかい合って使っていた敬語も抜け落ちていくのが興味深かったです。

そんな中、会話に参加しなくなっていった生徒がいました。後から聞いてみたところ、その子は普段から部活で「目上の人に対しては敬語を」と厳しく指導されているようでした。それなのに座談会の中で、周囲が目上の人に対して敬語抜きの会話を楽しんでいることに抵抗を感じていたそうです。

理由を聞いて「なるほど」とは思いますが、自分の不満について何も言わないまま終わってしまい、それで解決できたのでしょうか。

難聴学生は高校⇒大学⇒社会人と先に進むにつれ、周囲が聞こえる人ばかりの中、自分一人だけが難聴という環境に放り込まれることになります。そんな時に、自分が今困っていることや、どうしたら聞こえない自分に情報が伝わりやすくなるのかなど、まわりの人たちに話し、納得してもらい、必要なサポートを受けられるようにする、周囲との「交渉力」こそ必要なのではないかと、この学習会で感じました。